

説教 『耳と目の信仰』 山本 護 牧師
聖書 箴言 20:12 / Iペトロ書 1:8~9

現在の私は近視で眼鏡を必要とする。子供の頃の視力は標準、しかも顕微鏡と天体望遠鏡を使って微細な世界や夜空の彼方も見ていた。

やがて顕微鏡や望遠鏡は手放し、仄暗い喫茶店に入り浸って本を読んでいた青春期、近視になってしまう。視力が落ちた分、心の微妙な変化を見るようになった。

「聞く耳、見る目、主がこの両方を造られた(箴言 20:12)」。蝙蝠のような聴力や、猛禽類ほどの視力は必要ないだろう。この程度の聴力で、この近視のまま、率直に聞き、偏見なく見ればいいのか。

はたして私たちの耳と目は、まっすぐに聞き、客観的に見ることが出来るのか。聞こえることに段差をつけず、見えることを公正に感受できるか。神がお造りになったのだから、それが可能なのか。

哲学者 J.オルテガ・イ・ガセットは言った。「我々は目でものを見るのではなく、目を介して見る。つまり概念でものを見るのだ」と。確かにそうだろう。鼓膜が振動しても聞こえないことがあるし、網膜に映っていても見えないことがある。

それとは逆に、聞きたくないことが耳から離れず、見たくない残像が消えないこともある。私たちは目ではなく「目を介して」見、耳ではなく「耳を介して」聞いているのだから。神がお造りになった器官で(20:12)、「概念」ならぬ「信仰」で聞き、見る。

「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれている(Iペトロ 1:8)」。

使徒たちはイエスを見、そしてその声も聞いている。しかしステファノやパウロはイエスに会ったことがない。

イエスは復活した自分のことを「わたしを見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである(ヨハネ 20:29)」と語った。

見たことがないのにキリストを愛し、信じ、喜びに満ちあふれる小アジアの弟子たち(Iペトロ 1:1)。キリストを愛し信じることは、実際に見て、確かめて、納得するような「狭い私」に納める信仰ではない。聖霊のお働きに心を開いて、「狭い私」から脱出し続ける信仰だ。

キリストの姿は、網膜には映らない。また経験や理性によって「概念」を拡大しても、見えない。とはいえキリストは、確かに、私たちの内で生命溢れる現実となっているではないか。この真実の生命を、柔らかい手で掴みたい。

「それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているから(1:9)」。えっ、今もう「魂の救い」を受けちゃっていいの、と思う。

この言葉を少し敷衍してみよう。魂の救いは、キリストを愛し信じることで既に受けている。ただそれが完全に現れるのは、「終りの日」が到来する時だ。

私たちは、己が「根っこ」に魂の救いを受けている。それが地表にもれ出て、ほら君たちは「言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれている(1:8)」じゃないか、と呼びかけられている。

キリストが地上におられた時、直弟子たちはその姿を「見」、その言葉を「聞いた」。だが完全ではなかった。むしろキリストが天に昇り、見えなくなることで、魂の救いが弟子たちの根っこに宿った。

「聞く耳、見る目、主がこの両方を造られた(箴言 20:12)」。造られたのは、見えないキリストを見る目、聞こえないキリストの声を聞く耳。そうした器官が信仰。澄んだ信仰で、よく見、よく聞く。



《おまけのひとこと》

秋 葉が落ち 骨格としての幹と枝々が姿を現す 年毎の小さな終末の徴 のびのびした骨格から
地中の根茎が想像させられる やがて私も地に還り 根茎に吸収され 終りの日に青葉となるのか